

## バスケットボール競技における国際的トップチームの戦い方の変遷 ～アメリカ女子代表をモデルとして

エリートコーチングコース

5013A328-2 萩原 美樹子

研究指導教員: 倉石 平 准教授

### 1. 緒言

バスケットボールは 1891 年にアメリカの Naismith によって考案された競技である。その後アメリカから急速に世界中へと広まり、1904 年にオリンピック公開競技となり、男子は 1936 年、女子は 1976 年からオリンピック正式種目に採用された。1946 年には、NBA の母体ともなる BAA リーグが誕生した。いまや、NBA は世界中の多くの国と地域、もしくは多くの言語で放映されている。バスケットボール発祥の地である事実と NBA の存在は、私たちに、「バスケットボールと言えばアメリカ」という認識を持たせるに十分な背景であると言える。

女子のバスケットボールは、Naismith が初めて公式戦を行なった翌年に、Berenson がスミス・カレッジで女子に紹介したのが始まりである。当初は女子特有のルールも存在した。女子教育のための競技という観点は、永くアメリカの女子バスケットボールシーンにおいて主流であった。

このように興ったアメリカのバスケットボールであるが、男子と同様に、女子も国際大会で常にトップレベルに名を連ねている。過去 16 回開催されている FIBA 女子世界選手権では優勝 8 回、また過去 10 回開催されているオリンピック大会では 7 回の優勝を誇っている。特に近年のオリンピックでの成績は目覚ましく、1996 年のアトランタ大会以降、5 大会連続の金メダルを獲得している。

バスケットボールは、度重なるルール変更を重ねながら現在に至っている。しかし、こうした影響を受ける気配もなく、アメリカの女子が世界のトップに居続けられる理由はどこにあるのであろうか。本

研究では世界のトップに君臨し続けるアメリカ女子の戦術戦略を明らかにするとともに、その戦い方の変遷を追い、最新の戦術戦略の傾向を明らかにすることを目的とした。

### 2. 仮説

アメリカ女子のオリンピック過去 3 大会の、トップスコアラーのポジションと身長およびスタメンのセンターの身長の推移から、オフェンスの基点が従来のインサイドからアウトサイドに遷移し、ペリメーターの選手によるトランジションゲームを展開していると仮説を立てた。

### 3. 研究方法

対象とする大会はオリンピック過去 3 大会とし、アメリカ女子の戦術戦略を浮き彫りにするために、比較対象として各大会でアメリカ以外にベスト 4 入りしたチームを採り上げた。FIBA 公式ホームページの Boxscore の項目に、ゲームテンポを評価する計算式を用いた飯野(2010)の指標を加えた 33 項目を抽出し、その数値を大会別とチーム別に比較した。統計処理は IBM SPSS Statistics 20 にて、大会、チームの 2 要因分散分析を行なった。有意水準は 5%未満とした。

また、映像分析でシュートが行なわれている状況とシュートの種類を調査した。入手可能であった全 77 ゲームの映像について、PC 映像分析ソフト DART FISH Team Pro を使用し、PC 画面上に試合映像を映しながら、分類する項目にタグをつけていくタグging作業を行った。特に、シュートが行なわれている状況(FB/SET)と、ペイントエリアからボール保持者の 1 歩外側までのエリア(図 1)

で、ゴールを背にして行なう「POST」プレイが、3大会でどのくらい行なわれているかに着目をした。統計処理はIBM SPSS Statistics 20にて、大会、チームの2要因分散分析を行なった。有意水準は5%未満とした。

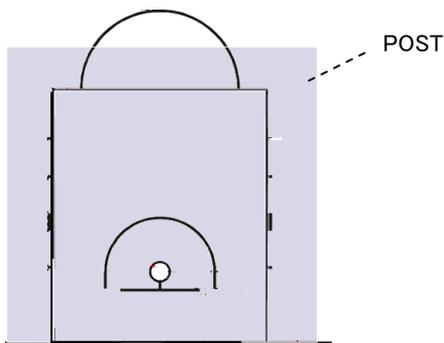


図1 POSTエリアの定義

#### 4. 結果・考察

##### 1) シュートの傾向

アメリカは他チームに比べて2Pシュートの試投と成功率が有意に高いことが確認された。3PとFTは他チームに比べて有意に低かった。アメリカはより確率の良い2Pシュートを選択して放とうとしていることがこれによって示された。3P以外のアウトサイドシュートには有意な差は認められなかった。

また、ガードとセンターのプレイヤーをそれぞれ4人選び、4人の合計のシュート試投数を3大会で比較したところ、アテネと北京ではセンターが、ロンドンではガードがそれぞれを上回っていることが分かった(図2)。これはロンドン大会で、チームオフェンスの基点が変わった可能性と同時に、ガードが自ら点をとりに行く役割に変遷していることを示している。

##### 2) オフェンスの傾向

アメリカは北京以降、他チームに比べてファストブレイクが多かったことが分かった。オフェンス効率が高かったのは北京のアメリカであった。インサイドとアウトサイドのバランスが良いチームであったと言える。

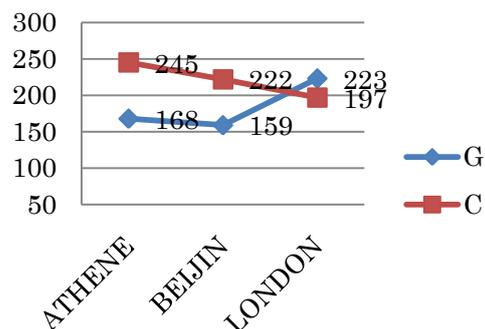


図2 3大会のガード(G)とセンター(C)のシュート試投数

また、ロンドンのアメリカは大会、チーム比較ともにファストブレイク数が有意に高く、ゲームテンポも速かった。FBインサイドが多かったことから、とにかく速い攻撃でゲームのテンポを上げ、ゴールに近い場所でシュートを打とうとしていたことが分かった。POSTプレイの出現は、北京のアメリカで高く、ロンドンのアメリカで低かった。以上のことから、アメリカはロンドン大会でオフェンスの基点をインサイドからペリメーターに移行させ、ゲームのテンポを速めるトランジションゲームを戦略として採用していたことが示された。一方でアメリカ以外の他チームは、ファストブレイク数がロンドンで有意に低く、ゲームのテンポもロンドンで遅かったことが示された。2001年のショットクロック変更後、アメリカはトランジションを速くする戦略を選んだが、他チームは、ディレイ気味に時間を使ってオフェンスを展開する戦略を選び、そしてそれが時間を経て、互いに徐々に定着しつつあることが分かった。

また、アメリカは他チームに比べてリバウンドが強いことが示された。

日本が今後世界のトップに比肩して行くためには、まずこういったトップレベルの戦術戦略を研究し、低身長ではあるが忍耐強いと言われるメンタリティを生かすオフェンスを確立して行くことが喫緊の課題であると思われる。